

可児市議会議長 澤野 伸 様

報告者

可児市議会議員 渡辺 仁美

教育福祉委員会行政視察報告書

所管事務調査を行いましたので、その概要を下記のとおり報告します。

記

1. 日 程 令和6年12月13日 15:30~16:45
2. 視 察 先 可児市立蘇南中学校
3. 視 察 事 項 校内教育支援センターの取組について
4. 出 席 者 教育福祉委員7名
(委員長)川合(副委員長)渡辺(委員)林、冨田、野呂、田口、酒向
5. 視察結果報告

【視察の内容】

蘇南中学校の校内教育支援センターを視察するにあたり、校長先生の説明を受けた。その中で、設置の経緯が述べられた。可児市議会一般質問への教育長の答弁において、令和6年度中に1校以上の設置を目指すとの発言があったことに言及された。新たな人的配置も備えられた中で、校長として蘇南中学校に赴かれたことを強く意識され、この新しい事業に取り組んでおられる。県費負担での相談室の相談員が1名、市費負担での校内教育支援センター支援員が1名である。後者については社会福祉士及び高校教員免許取得者であり、御嵩町での教育業務経験が6年あるとのこと。他に生徒指導の先生がこの2名の相談役のような役割となっている。令和6年4月に開設した校内教育支援センターは、不登校、いじめ、学校生活、生活習慣、親子関係、学習などの相談を生徒から受けながら、より良い方向を見つける支援を行う場所である。校内教育支援センターが学校復帰を助ける場所であり、さらに進んで教室復帰を助けるのが相談室である。相談室は、教室復帰に向けてのリズム作りを行う役割を担っている。通常の教室と同じ時間割で、タブレットを用いてリモート学習を行っている。実際には、学校には来られる

が、教室には入れない子が通室している。ここでの個々の相談内容は、校内会議にはかり、さらに良い方向性を見出している。

校内教育支援センターと相談室、そしてスマイリングルーム等の関係性であるが、月1回、通室者やその状況について報告し合い連携を図っている。また、個々のケース検討会議も行っている。これにより個々のケースに合わせた対応が可能となっている。子どもたちは、いわゆる定期テストを受けにくい状況にあるので、スマイリングルームに先生がテストを持って行って定期テストを受けることも行っている。現在、蘇南中学校では16名の子がスマイリングルームに通室している。また、スマイリングルームからは水曜日のチャレンジデーに蘇南中学校の相談室に通室する子もいる。スマイリングルームにおいても、校内教育支援センターにおいても、子ども一人ひとりが自分の状況に合わせて、来られるときの居場所としている。

校内教育支援センターに通う生徒たちは、毎朝、自分なりの企画書を作る。すなわち1日をどう過ごすか自分で決めている。ある生徒は、毎朝母親に送られてくるが、その際、家庭はどのように考えているのか、学校はどのように考えているのかをお互いに伝え合い、理解した上で生徒にとって良い方向性を見出している。また別の生徒は、校内教育支援センターと相談室、家庭、担任などがつながり、話し合った上で、日々自分がどこで過ごしたいのか決定している。この生徒は今年度修学旅行に行くことができた。現在は相談室への通室と放課後登校を繰り返している。4月までほとんど通学していなかったが、4月から現在までの出席日数は31日となっておりかなり来られている。さらに別の生徒は、2学年から3学年に進級する時不登校になったが、今は相談室に通室が可能となっている。この生徒と他の一部の生徒が夏休みの前日に、自分たちで企画書を作り先生に見せ、たこ焼きパーティーをするケースもあった。その時には、相談室で行ったたこ焼きパーティーに、今まで相談室に入れなかった子も多く参加していた。

校内教育支援センターという名称は堅苦しく感じられるという理由から愛称を募集したところ、様々なネーミングが上がってきている。今のところ名称の変更には至っていないが、生徒たちが居場所として捉えやすい愛称を模索している。

また、学校で給食を食べる事は、通学を続けることへの1つのきっかけにもなっているようであった。給食の時間になると、クラスメートが給食を校内教育支援センター近くまで運んでくれる。一方、校内教育支援センター通室生徒は、渡り廊下まで出てきて給食を受け取る。このことへの感謝の気持ちを手紙にしたため、クラスメートへの思いをアバターになぞらえたりしている。このようにして、無意識のうちに教室への距離を縮めている、そんな光景も見られる。

以下、質問への答えである。

①相談員と生徒あるいは生徒同士の関わり方はどのようなものであるか？

本日の様子で答えると、相談室に来られている子が5名おり、そのうちの2名は朝から毎日通室している。残りの3名は、給食をメインに考えながら、毎日外に出るよ

と言う意識で学校に来ている。しかし4月に外出したばかりであるので、まだ「がつつりと」どのような行動をするかと言うことについては、定まってはいないのが現状である。そして、相談員としては出てきた子供の感情を整えることを第一に考えている。なかなか来られていない子には家庭訪問を行い、学校側の考えていることを子どもと家庭に伝えている。相談員と子供との関わりはこのようなことである。

子供たち同士の関わりであるが、3年生の子が背中を見せてくれている。朝の通室時に立てた1日の過ごし方を自ら守って率先している。その背中が他の子にも伝わっているようである。

②校内教育支援センターの先生の権限はどのようになっているか？

学校運営上、権限という言葉はあまり用いないが、担当する上での判断と言う点であれば、相談員や先生方の相談を受ける立場の先生がおり、その先生が、学校全体の運営や、校長先生の持つ経営ビジョンをしっかりと把握しており、それに基づいて判断に臨んでいる。ゆるぎない連携がなされていると言える。

③設備や空間の不整備などを感じる事はあるか？

4階にある校内教育支援センターは元は倉庫であったがそこをリメイクした。そこをきれいに整えたのは相談員であるが、空調だけは設置されていなかった。そのため夏はあまりの暑さに市に相談したところ、空調設備を整えることができた。このことに非常に感謝している。また、学校規模に合った人員配置が検討いただけるとありがたい。できれば観葉植物や生物などを置けるといいと思っている。また、生徒数の多い中学校であるため教室の不足がある中、ここを校内教育支援センターとして継続使用できることが、必要不可欠であると考えている。

【考察】

今回視察した蘇南中学校の校内教育支援センターは、生徒一人ひとりのニーズに応じた支援を提供し、学びの環境を整える重要な役割を果たしていく仕組みのひとつであると実感した。そして、その子たちのためにより良い方向性を見出そうとする先生方の姿も改めて感じ、先生方の日々の努力は一朝一夕にして成果を見るものではないことも理解できた。

また、これから解決すべきいくつかの課題もあるように思われる。

課題

1. 校内教育支援センターの相談員（教職員、カウンセラー経験者など）の不足が考えられるため、必要な支援が十分に行き届くように学校規模に応じた人員の配置を行うこと。
2. 相談員と教員、保護者との効果的なコミュニケーションや、支援教室を導入している学校間で支援内容の情報共有の更なる充実を行うこと。
3. 校内教育支援センター運用1年目で経験値がまだ積み上がっていないこともあり、

生徒の特性やニーズに応じた個別支援を手探りで四苦八苦しなから行わざるを得ないこと。

4. 特別支援が必要な生徒への理解が学校全体に行き届いていないことから、差別や偏見が生まれる可能性が否めないこと。

以上ではあるが、本市の中学校の校内教育支援センターは今年度スタートしたばかりであり、それを解決するための具体的な展望や戦略を立てることで、より良い教育環境を提供できると考える。



校内教育支援センター



相談室



別室のパーテーションで仕切られた空間